



愛の反対は憎しみでなく 無関心なのです。〈マザー・テレサ〉

国際ロータリー 第2650地区

2002～2003年度 ガバナー 岡村 吾郎

世界の平和について振り返りますに、米ソ二覇権国家の争いが終結した時、これで地球は平和になるであろうと思いましたが、そうはまいませんでした。現に争いの炎；民族と宗教の紛争が起こっています。そもそも宗教とは、人々の心を癒し世界を平和にするものであった筈なのに・・・

併し、日本では神道、仏教、キリスト教、その他の宗教が共存し平和に暮らしています。その理由は？・・・。日本人には他人を認める寛大さがあり、お互いの寛容と情に依って平和が保たれているのです。

すでに100年前の日本に於いて、則ち江戸時代から幕末にかけて広く庶民の間に、人に対する思いやりが教養の信条として拵がっていたのです。皆さんも御存知の二宮尊徳、渋沢栄一氏が唱えました「報徳の精神」です。この精神は正しく仏教国出身のR I ビチャイ・ラタクル会長の述べられた「慈愛の心」と同じくするものであります。とすれば、国際奉仕活動には、日本人が一番適任者であり、力を入れて世界を平和に導くべきではないでしょうか。

併し、一般社会はともすれば突発的な大事件や自分にかかわりのある事柄には敏感なのに、長期化した悲惨な事態や遠い国の出来事には無関心なことが多いのです。ですから平和で、幸せな私達は世界へ関心の目を広げて「もしも私達があの人達の立場にいるとすれば」と思い起こして援助の心を育てていくべきでしょう。

併し「慈愛の心」は本能ではなく訓練によって身に付くものなのでから常に心すべき事を忘れない様にしたいと思います。

その実行にあたり私達ロータリークラブの国際奉仕の世界社会、災害救援、飢餓救済、交換学生、米山奨学生、ロータリーセンター etc. を通して世界理解と平和への推進に努力しましょう。

私達は見ている人ではなくやる人になろう！！

国際青少年交換プログラムの理想

地区国際青少年交換委員会 委員長 松山 隆 (奈良RC)



お陰様で2650地区における青少年交換学生の数、今年度をもって今までの派遣・受入学生の総合計数が1000名を超えました。これも30数年の長きにわたり支えて頂いたロータリアン、ホストファミリーそして学校関係者の賜物と深く感謝申し上げます。

一時は、年間の派遣学生数が35名（受入学生を含むと70名）を超した年もありましたが、昨今は、その半数近くに落ち込んでおり、将来に向けて多少の不安感を覚えて居るのが現状です。この原因は、わが地区における青少年交換プログラムのシステムに拠るところがあります。

例年、交換学生の募集は、7月より9月に掛けて行われますが、1学生が交換学生に応募するには地元のロータリークラブにスポンサーしてもらわないと応募できないシステムになっています。海外での勉学に非常に熱心な学生がいても地元でスポンサーしてくれるクラブが見つからなければ応募する機会さえありません。スポンサーするクラブは、一人の派遣学生をスポンサーして海外に送れば、交換に一人の海外からの受入学生をホストして1年間面倒見るシステムになっています。受入学生をホストすることは、その喜びも大きいかわりに、費用もかかるし、世話もなかなか大変です。したがって世界に羽ばたく素晴らしい若者を育てて行こうと言う崇高な奉仕の心を持って学生達のお世話をしているスポンサーあるいはホストするクラブが段々減少しているのが昨今の現状です。

潜在的に交換学生に応募したい学生は、たくさんいると思われま。スポンサーしてもらおうクラブを捜さずとも応募できるシステムを作り、1府3県のすべての中学、高校に応募の案内を出せば、かなりの熱心な学生を集められるし、応募学生の質の向上が出来るはず。そのためには、派遣と受入のクラブを別個にし、派遣は派遣で、受入は受入で考えなければなりません。今、一番困難なのは、受入学生をホストしてくれるクラブの減少です。地区内の90数クラブの中には、青少年交換プログラムに熱心なクラブもあれば食わず嫌いで経験のないクラブもありますが、この青少年交換プログラムの素晴らしさを経験して頂く上にも、機会均等に、毎年30クラブが交代で（3年に一度）1学生を1年間ホストして頂くシステムが出来れば、地区内のすべての高校生にこの青少年交換プログラムを経験してもらえ、機会が平等に与えられるのにと願います。派遣・受入学生数を各30名に固定すれば、相手地区との派遣・受入交渉も安定して出来ます。しかし、このシステムも難しい面があります。それぞれのクラブの地元の高校が受入学生を1年間預かってくれるかどうかです。海外からの学生が高校に一人在籍すれば学校の雰囲気がガラッと変わります。府・県下の教育委員会に働きかけて交換学生の受入を働きかけていかなければなりません。国際化と言われて久しいのですが、教育の現場の分野が一番遅れているような気がします。

ガバナー公式訪問だより



2002年12月3日 野洲R C

会長：原田 薫 幹事：松永 諭

本日は好天に恵まれ岡村ガバナーの86番目公式訪問は野洲R Cです。琵琶湖の美しい風景を眺めながら、原田会長、松永幹事より暖かく出迎えて頂き早速公式行事に移りました。今年はクラブ協議会でパソコンを使ってされたのが印象的でした。会員の皆様ご協力ありがとうございました。(長谷川 嘉信)



2002年12月4日 京都嵯峨野R C

会長：藤田 浩哉 幹事：田中 雅一

岡村ガバナーの定型句となった「友情公式訪問」の言葉どおり、終始和やかにすすみました。「少人数でも出来ることからコツコツと」という藤田会長と、「目的、活動テーマを絞って」というガバナーの方向が一致し、会員増強への意欲も充分でした。(菊岡泰政)



2002年12月5日 大津唐橋R C

会長：吉川 静雄 幹事：傍田 徹

創立8年目で会員数も少なく運営にはご苦労も多いと思いますが、反面とても和やかでまとまりのあるクラブとお見受けしました。吉川会長の下、会員増強にも熱心で、充実したクラブライフを過ごしておられるのが見取れました。

(上林 賢)



2002年12月6日 亀岡中央R C

会長：森 啓一 幹事：古前 極

岡村ガバナーの公式訪問は、森会長等のお出迎えを受けました。少ない会員数にもかかわらず青少年交換等に積極的に取り組まれ、来期10周年を迎えられる和気藹々とした活力のあるクラブとお見受けしました。(北浦 康充)



2002年12月10日 王寺R C

会長：樋口 俊夫 幹事：北之坊 和代

岡村ガバナーの公式訪問は、樋口会長他、多数の同クラブロータリアンのお出迎えを受けました。若さあふれる樋口会長と女性の北之坊幹事のもと、非常にバイタリティーあるまとまったクラブとお見受けしました。(青木 謙友)

ガバナー公式訪問だより



2002年12月13日 京都モーニングRC

会長：堀場 厚 幹事：林 研志

堀場厚会長様はじめ会員皆様の歓迎を受け、例会開始前には朝の体操、そしておいしい朝食を頂きありがとうございました。心地よい素敵な朝の例会で、すがすがしく一日をすごさせて頂きました。感謝します。(鍛冶 佳広)



2002年12月17日 福井フェニックスRC

会長：吉川 寿一 幹事：森 隆

吉川会長、森幹事等のお出迎えを受け福井ワシントンホテルで行われました。会長・幹事のもと、すばらしい結束力と今年の10周年記念事業に向けて熱い情熱を感じさせる活力あるクラブとお見受けしました。(青木 謙友)



2002年12月19日 奈良RC

会長：八木 春樹 幹事：堀川 佳亜

岡村吾郎ガバナーの出身クラブである奈良RCは公式訪問最後の93番目のクラブであります。ガバナー事務所のスタッフ、地区大会のホストクラブとして奈良RCの皆様には大変なご協力、ご支援を頂きまして心より感謝を申し上げます。来年の6月末までのあと半年間よろしくお願ひ申し上げます。(城田 全康)



ロータリー情報委員会だより

ポリオプラスの悲願

地区ロータリー情報委員 谷内乾岳 (京都西RC)

歳末の頃、テレビニュースの中でポリオから子供を守る為、W・H・Oが長年の努力を続けているが、ワクチンの投与などに困難をともなうため、なお一層の努力が必要であると報じられていた。

ロータリーも1982年にポリオ・プラス・プログラムが設定されて以来、W・H・Oの活動を全面的に支援した結果、2000年10月には西太平洋地域のポリオ・フリーが京都に於いて宣言され、続いてアメリカ地域、更にヨーロッパ地域での宣言と、着実に成果が挙げられた。

しかしロータリーが目標としている2005年までに、地球上から完全にポリオの撲滅を実現したと宣言するためには、その前の2年間に発病者が無かったと確認することが前提となる。とすれば目標実現可能の最終章が今年中ということになる。これについて手続要覧の69頁に「その撲滅が達成されるまでは、他のいかなるプログラムよりも最優先事項となる」記述を再認識し、一層の支援が必要である。

第2回青少年委員長会議

地区青少年委員会 副委員長
土堤内 清昭（平城京RC）

日時 2003年1月18日(土) 14:00～17:00
場所 ホテル京阪京都



地区青少年委員会担当幹事大島國裕様の司会にて、午後2時に岡村吾郎地区ガバナーの点鐘で第2回青少年委員長会議が開会されました。

プログラム第一部は、岡村吾郎地区ガバナーにご挨拶を頂きましたあと、地区ローターアクト委員長長崎一幸委員長、地区インターアクト委員会竹内弘太郎副委員長両氏に、両委員会の活動についてお話を

頂きました。その後、地区青少年委員会森定秀夫委員長より、今年度のRYLA開催概要と受講生推薦のお願い、そして以前より地区青少年委員会にて長年懸案されていました「RYLA友の会」（RYLA受講生のOB会）開催についての主旨説明がなされました。

※2月16日（日）ザ・パレスサイドホテル（京都）で第一回RYLA友の会開催予定。

プログラム第二部では、パネルディスカッションを行い、前地区青少年幹事片岡宏二様にコーディネーターをお願いし、前年度のRYLA受講生4名と米山奨学生1名をパネリストとして、テーマ「RYLA経験とその後」を、75分の時間が短く感じるほど楽しく、有意義に語って頂きました。

最後に地区青少年委員会諮問委員・直前ガバナーの西村二郎様にご挨拶を頂き、岡村吾郎ガバナーの点鐘にて無事、第2回青少年委員長会議を閉会致しました。

財団国際親善奨学生

第1回 オリエンテーションおよび帰国報告会の開催



財団奨学金・学友委員会 委員長 中野 種樹（京都西山RC）

毎年1月恒例となりました、次年度出発する、財団国際親善奨学生の第1回オリエンテーションと今年度までに帰国した、奨学生の帰国報告会を、今年は1月18日に京都商工会議所で開催いたしました。午前にオリエンテーションを、午後には帰国報告会をそれぞれ行いました。

2003-2004年度奨学金受領予定者のための第1回オリエンテーションの目的は、第一にロータリアンと奨学生とが親しくしていただくことと、これから先留学前、留学中、帰国後もお互いコンタクトを取り合っていただくことを確認しました。大事なことは、帰国後も財団学友としてロータリーと深く関わってもらうことで、そのためにはまず奨学生と顧問ロータリアンの絆を強めていただくことが大切です。第二には財団学友のオリエンテーションへの積極的な参加です。今年も多くの先輩財団学友が参加し、留学国別にグループ分けをして、先輩学友と今年出発予定の奨学金受領予定者との話し合いの時間を設けました。このような形で財団学友にも後輩の指導に積極的に参加してもらっています。

2001-2002年度財団奨学生帰国報告会にはご来賓にガバナー代理として、地区幹事長松岡泰夫様にご出席いただきました。また、午前中のオリエンテーション参加者に加え、地区内各クラブから財団委員長様にご出席いただきました。今年も帰国奨学生にはすばらしい成果を発表してもらい、あらためて財団学友は、財団増進の有力なスポークスマンだと再認識しました。当日の発表者は、次の方々です。発表内容は小冊子にして各クラブに送付させていただきましたので、ご覧ください。

（報告者） 1999-2000年度：鈴木美登里（京都北RC）中野悦子（京都山科RC）桑山智成（京都北RC）

熊本恭子（京都洛北RC）岩崎由希子（武生RC）

2000-2001年度：中堀博司（桜井RC）池田拓吉（橿原RC）水野清香（京都紫野RC）

2001-2002年度：澤井なつみ（橿原RC）高島依子（京都西RC）塚本有紀（奈良RC）

北川義政（彦根南RC）中嶋文重（彦根南RC）

〈2003～2004年度〉

第1回地区委員長連絡会議

地区幹事長予定者 高橋 秀和（京都山城RC）

日時 2003年1月18日（土） 場所 けいはんなプラザ

2003～2004年度第1回地区委員長連絡会議が、1月18日（土）学研都市のけいはんなプラザで開催されました。岡村ガバナーは、これから始まる年度が輝かしい年度となるかどうかは、私達ロータリアン一人一人の奉仕に対する情熱とその行動いかにかかっていると述べられました。又私達は他人のために生きるから今日の自分も生かされている。他人のために生きてこそ、自分の心が育つ。そのような気持ちで頑張るようと、委員長を始め出席者全員を激励して下さいました。福井ガバナーエレクトは、厳しい社会情勢の中、ロータリーも地区もクラブも大きく変革すべきである。そのためロータリアン一人一人が変わり、クラブも変わり、地区委員長も変わり、地区委員会も変わり、ガバナーも変わるべきであると決意をのべられました。そして当地区の委員会活動は伝統的に自主性と自治権をもって活動して戴いておりますので、継続性の良い点はより一層伸ばすようにと、具体的にロータリーの奉仕活動に対する心構えを述べられました。



各委員長予定者の自己紹介と共に、抱負や意見の発表があり、幹事長予定者からは、ガバナー事務所からのお願い事項と、例年との変更事項の説明があり、地区資金委員長予定者からは、予算の見直しと各委員会への予算の割り当ての発表がされ、月信担当幹事予定者からは、月信のインターネット化についての取り組の発表がありました。懇親昼食会の後ガバナーエレクト事務所と、けいはんなプラザのラボ棟の見学をして戴いて散会となりました。第2回は、3月29日（土）に同所で13時30分から開催される予定です。

県下17RC統一事業でミャンマーに 慈愛の種を播く協力をさせていただいて

福井東ロータリークラブ会長 坪川利男

第112回福井県下ロータリークラブ会長幹事会で増田ガバナー補佐の力添えをいただきながら県下で初めての統一事業を福井東RCが担当することになり、少々の行き違いはありましたが私の決意からは無関係でした。

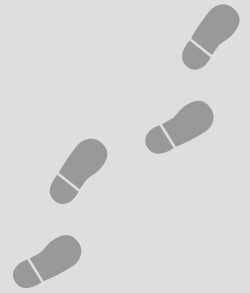
第1回目の訪問を契約のため福井東RCメンバー3名で参加。県下17RCメンバーの浄財を適格に明確に運用すべく最後まで責任感は大変でした。また今迄に体感することのない満足感又充実感を今も感じています。

第2回目を福井北RC会長の山浦節桜氏と私、弊社社員五十嵐君（ビデオ撮影係と建築現場技術確認係）として同行しました。山浦会長も感動をいただき、青少年委員活動も積極的にされています。又五十嵐君は感動の余り、僕も一人で学校寄贈してみたいなとまで発言があり、夕食の席も盛り上がりました。（ライラに参加します）ミャンマーの首都ヤンゴンで日本人墓地に参ることが出来て、確認させていただきました。石碑に「戦没者霊苑の由来」に1941年～45年の大東亜戦において、19万人戦没者があり、ビルマ（当時は国名はビルマでした）の人々は日本軍を歓迎し援助し、敗戦後も変わらぬ仏心で我々に接してくれました。本当にありがとう。県下17RCより60年以前にすでにミャンマーの人達に慈愛の種を播れていました。この事はロータリークラブでの活動で知ることが出来たことに感謝をさせていただきます。これからは私も青少年委員長と共にエリアの小学校との絵と文化交流にソフトの対応をしていきます。

地元小学校より社会科の時間に説明に出席下さいと電話があり、青少年委員長と共に参加します。他に6小学校とRCの交流が決まりました。ミャンマーの子供達の心の素晴らしいことを伝えたいと思います。この事業で建設正副委員長とパストガバナー宮崎氏、ガバナー補佐増田氏の強力なるパワーと御協力に感謝申し上げます。大阪地区柘下邦彦君ロータリアンにも御協力御礼申し上げます。

地区 探訪

地区内の伝統的な「行事」や「芸能」「食」
などに関する話題を
地元RCからお伝えします



無形民俗文化財 八日市大凧祭り

八日市RC

西沢 高弘

八日市は、琵琶湖の東に広がる湖東平野のほぼ中央に位置し、八日市の名は聖徳太子が大坂四天王寺建立のための瓦を箕作山麓で造らせた時に、各地から集まった人々に交易の道を教え、古くから経済、商業の要衝として栄え、以来「八」の日に市が開かれたことに由来しています。このような地域性から万葉の時代には額田王と大海人皇子の間で相聞歌が交わされ、江戸時代中期より受け継がれてきた八日市大凧、また江州音頭などの文化が生まれてきました。

今回紹介します八日市大凧は、江

戸時代の中頃、男子出生を祝って5月の節句に揚げられたのが始まりです。その頃の凧はせいぜい半紙2枚から、5、6枚くらいのものでした。しかし、近江人気質の負けん気と技術の進歩によって、凧は除々に大きくなり、明治29年には畳200枚、縦18m横16m全重量1tのもの、最近では昭和59年には畳220枚、縦20.5m横19m重量1.5tという日本一の大凧が揚げられています。大きさの他に、墨絵と色文字で凧全体に意味を持たせる「判じもん」の図柄や凧の抵抗を少なく



する「切り抜き工法」収納運搬を考慮した「長巻き工法」など全国でも珍しい特徴があります。

八日市大凧は、当時の金屋村、中野村、芝原村の人たちによって競争され、秘伝としてその技術が受け継がれ、「八日市大凧」は国の無形民俗文化財に選択されています。

毎年5月の第4土曜日に開催されます「八日市大凧祭り」には百数十人の引き手による100畳敷き大凧の飛揚をメインに、20畳敷大凧を始め全国各地から集まった凧愛好家による様々な凧揚げが催され、大空高く舞い上がる壮大な姿は見応えがあります。



生駒山寶山寺の伝統行事

生駒RC

松本 亘



生駒は「聖天さん」で地元は元より、関西一円に親しまれている生駒山寶山寺の門前町として開けました。大正7年に日本で初めてケーブルカーが敷設され参拝の人達の便を図っております。この寶山寺には多くの年中行事が伝わっておりますが、その内の主な行事を紹介します。

1. 大護摩会式（4月1日）

延宝8年(1680年)4月中興開山湛海律師が焚かれた八万枚護摩供の偉業を偲び入滅後、国家安泰・五穀豊穡を祈願して、八千枚の護摩供の修行が引き継がれています。現在は3月25日に前行開白、4月1日午前9時から護摩供が厳修され、参拝者には火難除けの護符が授与されます。

2. お彼岸万灯会（9月23日）

「天地の恩」「国の恩」「師の恩」「父母の恩」の四恩に感謝を捧げ、御先祖の供養と家庭の安全を祈願して、全山を万の灯で覆い尽くす法要です。午後5時に火が点ると本堂前で法要が始まり、読経の後に僧侶のお練り

に従って手燭を掲げる参拝者の列が続き、地藏尊などが立ち並ぶ参道を奥の院へと登って行きます。奥の院での法要が終る頃には日も暮れて、初秋のお山は幽玄の闇につつまれ、心洗われる一夜となって行きます。

3. 般若窟柴燈護摩供

（11月第3又は第4日曜日）

当山開基役行者と湛海律師のご高德を偲び、国家安泰・五穀豊穡・家内安全・交通安全等を祈願して柴燈護摩供が厳修されます。終わった後、信者の方々の「厄除け・開運」を願った火渡の行事が行われます。

4. 聖天厄除大根炊（12月1日）

聖天さまの御紋には、宝袋(巾着ともいう)と大根があり、聖天さまの

「物と心」のお徳を表わしています。宝袋は貯金・財産を入れるもの、大根は心の悩みを救うものとされています。聖天さまが住んでおられた象頭山には沢山の大根が生えており、常々大根を口にされていたと伝えられており、この故事により日々の供養には必ず大根が供えられています。

一般には大根は心身の毒を取り除くと言われてるように、聖天さまは私達の心の毒を除き、悩みを静め、その上で願い事を聞き届けて下さります。このような靈驗あらたかな聖天さまお下がりの大根を召し上げて頂き、1年の毒を除き、新しい年を迎えて頂くのがこの大根炊の行事です。



般若密柴燈護摩供・火渡式

寄稿

ロータリーの財団留学生として留学された岡田玲氏が、
この度、長浜RC名誉会員として入会されました



2002年 「真夏の夜の夢」

岡田 玲

長浜RC名誉会員（財団学友）

昨年の夏のことでした。私は、自分の身に起きた不思議な出来事を振り返っていました。それはまさに「真夏の夜の夢」でした。滋賀県の長浜ロータリークラブから、名誉会員に推薦したいというお話をいただき、なんとそれをお受けしてしまったのです。長浜クラブは私がロータリー財団奨学生として留学したときのスポンサークラブです。しかし私が長浜クラブの名を口にすると、そのご縁が財団奨学生に応募した時のスポンサークラブであったというだけでは十分ではありません。ロータリーがどんなものかなど何も知らなかった私を例会に招き、ロータリアンにお会いする機会をくださり、スピーチの機会を通して国際社会と平和を考える機会を与え続け、今日の私を作ってくださったスポンサーです。帰国後もスポンサークラブにこれほどまでに慈しまれ勉学の機会を与えられた学友が他にいるだろうか、私はしばしば思うのです。

多くの財団学友にとってそうだと思うのですが、私にとっても奨学金に応募した動機は、ロータリーがどんなものか知りたいということではありませんでした。私はただ、留学して勉強したい、職業人として毎日接している障害児のことをもう少し知りたいと願っていたにすぎません。帰国後は職場に復帰して、一福祉労働者としてささやかに職業生活を全うし、願わくは健康で平和な老後を生きる、漠然とそんな人生を思い描いていたのではないかと思います。

こういう人生設計が定年退職後の今、思い描いた通り実現しているのか、それとも少し軌道がそれているのか、私にはよくわかりません。平穏と言えば平穏、忙しすぎると言えば少々忙しすぎる、しかし健康で幸せな日々が与えられているというのが、私の最近の実感です。忙しすぎるとは言っても、いずれ一つまた一つと仕事は若い人たちに引き継ぐことになるでしょう。そうすれば気になりながら放ったらかしの庭の草引きくらいはできるかな、またしてもそんなことを考えていました。

その矢先、名誉会員というお話があったのです。もちろん名誉会員とは何かの説明は聞きました。しかし、それがどんなものか、すぐには理解できませんでした。一体私は、これまでどう貢献してきたのでしょうか。今後どんなお役にたてるのでしょうか。そうでなくても私は今まで、招待してくださるのをいいことに、湖都長浜の例会に行くのをただただ楽しんでだけいたのです。こんなことを続けていていいのかなあと、実は少々不安に思っていた矢先でもありました。ですからお話をいただいた

とき、そればかりはとためらわずにはいられませんでした。にもかかわらず、ほんの数分後には、お受けしようと決心していました。「あの失敗は繰り返したくない」と思ったからです。

話は25年前にさかのぼります。今でもそうだと思うのですが、財団奨学生に選ばれた人たちに与えられる宿題があります。少なくとも私は、これを宿題だと思いました。「世界を理解すること、国家親善に寄与すること」。まだ出発もしないうちから、私はこの宿題に悩み始めました。そんな抽象的で訳のわからないお題目みたいなのではなくて、もうちょっとできる宿題を出してほしい！そんなの解答の出しようもないではないか！と。しかしそれがどんなに無知な思い上がりであったかを、留学中のたった1年で思い知ることになりました。世界の多くの人々との出会いを通して。

教育やセラピー、その他ことばは何でもいいのですが、人が他の人に働きかけて相手の認識や行動を変容させていく営みというのは、明確なテーマを提示し、その解答を学習者自らが発見できる機会を用意することだと思います。教育のこの原則と手法を、私はロータリーから学びました。少なくともロータリーを通して明確に認識することになりました。「世界理解」というのは、出発前私が考えていたような抽象的なお題目ではなかったのです。

すでに「ロータリーの友」1999年11月号にも書いたことですが、このことを明確に認識させてくれた出会いがあります。私はある講演会で一人の韓国人留学生の発言を聞きました。韓国と日本の関係が今とは違って大変厳しかった20年あまり前の話です。その学生は、自分の父親が第二次大戦中日本へ留学していたこと、ある日憲兵が寄宿先の日本人家庭へ搜索に来たこと、その家族はあらかじめ申し合わせたとおり、父親を押し込んで布団をかぶせてかくまってくれたこと、戦後の韓国の学校で日本敵視の教育がなされていたときにも彼女の家庭では日本を悪く言うことは許されて来なかったこと、などを話してくれました。平和を守るというのはこういうことなのだとすることを直感し、大きな衝撃をうけました。この日本人家族や彼女の父親のようになること、それが他国を理解し平和に貢献することなのだと思います。平和とは一人一人の平凡な生民が実践するべきことなのだとすることも、教えられました。今でもこれが、私が世界を考えるときの原点となっています。そして、出発前不遜にも「そんな抽象的で訳のわからないもの」と思った自分を、悔やまざるを得なかったのです。

名誉会員にというお話をいただいたとき、私が「あの失敗を繰り返したくない」と思った失敗とはこういうことです。私がロータリーのお役に立つのか立たないのか、自分に何ができるのかなど、この時点で考えても仕方がない、導かれてゆけばいい、その先できっと世界を知るためのさらに大きな機会が与えられるだろう。今までもそうであったように、と思いました。結果的にはまた大きな榮譽をいただくことになりました。これが昨年私の「真夏の夜の夢」です。

話は変わるのですが、年をとったせい、ひょっとするとこの「真夏の夜の夢」のせいだったのか、昨年は眠れない夜というのを何日か経験しました。終戦記念日だったと思うのですが、とうとう朝の4時を迎えました。もう本を読む気力もなく、何気なくラジオのスイッチを入れました。ラジオ深夜便の番組で裏千家家元、千宗室氏が、インタビューを受ける形で話されていました。眠れない夜というのも時には恵み深い贈り物だと思います。タイトルは「語りつぐ戦後」だったと思いますが、なにしろ明け方の頭での記憶ですから、間違っているかもしれません。お家元が特攻隊から辛くも生き残られた経験をお持ちの方

だったとは、このとき初めて知りました。ロータリーのいろいろな会合でお目にかかるときの、おだやかな、しかし大変な肩書きのついた、私にとってはちょっと遠いところにいらっしゃる、お家元を思い出していました。お仲間が次々と出撃されるさなかの終戦間際の出来事と当時のお気持ちを語っておられました。心にしみとおる思いで聞きました。

ロータリー財団はやがて100周年とのことですが、お家元は戦後何年間、ロータリアンだったのでしよう。「平和のための財団」にどんな思いで貢献してこられたのでしょうか。財団の恩恵を享受してきた私たちに、今どんなメッセージを送りたいと思っておられるのでしょうか。私たちが恩恵を受けてきたロータリー財団は、こういう方たちの思いのこもった財団なのだとすることを改めて思います。もし私がかつてロータリー財団奨学生でなかったら、私はこの眠れぬ夜に偶然聞いたお話にこれほど関心を寄せることができただろうかと思えます。

ロータリーのおかげで私は、留学中だけでなく今も、本当にたくさんの方々に会います。そのことによって私の人生はどれくらい豊かになったかしれません。私の職業である社会福祉事業という小さな枠組みの中で終える人生も、それはそれでよかったのかもしれない。しかし、ロータリーを通してもっと広い世界を知ってしまった現時点から振り返れば、日々世界に思いを馳せることができるのは、やはり幸せだと思います。そして今は、その幸せの裏にある責任をどうして果たしていくことができるのか、もう一度原点に立ち返って考えてみたいと思っています。見果てぬ夢をしてではなく、実行可能な現実として。

ロータリーにこんなにも深くかかわることになった私を、これからもどうぞよろしくお導きください。

〈略歴〉

1964年・ノートルダム清心女子大学(岡山) 文学部英文科卒業／1967～98年・社会福祉法人びわこ学園(言語聴覚士)／1979年6月～80年6月・ロータリー財団奨学生として米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校へ留学。言語障害学を専攻。／1988年1月～90年12月・第2650地区財団学友幹事／1999年6月・ロータリー財団学友奉仕賞受賞／2002年8月1日・長浜RC名誉会員

〈現職〉

重症心身障害児施設第一びわこ学園嘱託(言語聴覚士)／身体障害者療護施設湖北タウンホーム(言語聴覚士)／滋賀県立新旭養護学校(非常勤講師)／滋賀県八日市市障害幼児療育教室(言語聴覚士)／名古屋文化学園医療福祉専門学校(言語聴覚科非常勤講師)／リハビリテーションカレッジ島根(言語聴覚科非常勤講師)

福井ガバナーエレクト アナハイム国際協議会へ出発

地区幹事長予定者 高橋 秀和(京都山城RC)

福井ガバナーエレクトはかねてから、アナハイム国際協議会出発の見送りについては、不要である、辞退したいと申し込まれました。私たちクラブ会員一同は、多少の迷いはありましたが、時節柄福井ガバナーエレクトの言葉を額面どおりに受け、関西空港へのお見送りはしないで、1月22日クラブ例会で、福井ガバナーエレクト夫妻の歓送会を開催することになりました。木下会長が国際協議会の重要性とその意味を話され、健康に十分留意して任務を全うして来て下さいと激励の言葉を述べ、花束とクラブからの餞別を贈呈されました。続いて福井様から、国際協議会に望む強い決意表明があり、例会終了後全員握手と拍手で、福井夫妻をお送りしました。

